

先月下旬に、岩波書店から新著を上梓した。本書で強調したのは「資金を資本化する資本システム」という観点で世界経済を鳥瞰すれば、中国や欧州、米国、そして日本など至る所に政治経済的な時限爆弾が拡散していることがわかる、というテーマである。景気は好調だと慢心したり安心したりしている訳には行かない、という警告でもある。

たまたま発売になった時期が世界同時株安と重なったため、株価急落をテーマにしたような本だと誤解され易くなったが、本書は特に株式市場に焦点を当てたものではなく、市場経済を司る「資本システム」が如何に脆弱な存在であるか、という問題提起を狙ったものである。リーマン・ショックは過去の遺産になった、といった考えの甘さを指摘したつもりでもある。

俗にいう「金融システム」と、筆者が訴える「資本システム」との違いについては、本書を読んでご理解いただきたいと願うが、大雑把なアナロジーで例えれば、金融システムは血液の流れであり、資本システムは心臓の鼓動メカニズムである。「危機の資本システム」とは、言ってみれば、資本主義経済における心臓部が不整脈状態にあることを示している。

また、地域的な分析だけでなく世界を鳥瞰することで、現在の資本システムが記録的な債務と迷走する金融・財政・通貨などの経済政策、地政学の変貌という三つの変数に脅かされていることを浮き彫りにしたつもりである。その危うい情勢の不透明感を、経済ナショナリズムが加速していることは、言うまでもないだろう。

いま市場は、株価急落を契機に漸く資本システムの健全性や耐久性に疑念を抱き始めたように思われる。来年は、世界に広がる攪乱要因に一段と市場変動率が上昇し、景気の不透明感が強まる可能性もあろう。だがそれを単純な景気サイクルの一局面と見るのは、「危機の資本システム」が抱える問題を矮小化し、過小評価することになるかもしれない。本書がそうした危機回避への指標として、少しでも貢献できれば幸いである。